

2016年(平成28年)1月17日(日曜日)

民報

(2)

福島の外では、もはや誰も関心を示さないが、どうやら森林除染は行われないうらい。環境省が、生活圏から離れ、日常的に人が立ち入らない大部分の森林は除染を行わない方針を示した、という。それでいて、いつ、誰が「安全」だと公的に宣言がなされたのかは知らず、なし崩しに「帰還」が押し進められている。

わたしは民俗学者である。だから、見過ごすことができない。生活圏とはいったい何か。人の暮らしは、居住する家屋から二十メートル以内で完結しているのか。もし、そうであるならば、民俗学などという学問は誕生することはなかった。都会ではない、山野河海を背にしたムラの暮らしにとって、生活圏とは何か、という問いかけこそが必要だ。

かつて「前の畑と裏のヤマ」とい

日曜論壇

赤坂 憲雄



山や川や海を返してほしい

言葉で、仙台近郊で聞いたことがある。平野部の稲作のムラであっても、田んぼのほかに、野菜などを作る畑と、イグネと呼ばれる屋敷林を持たずには暮らしていけなかった。イグネはたんなる防風林ではない。たくさんの樹種が周到

文化の、なんと多彩で豊かであることか。正月に始まり、季節の移りいなかにならねられてゆく年中行事には、それぞれに儀礼食が主婦によって準備される。その食材は家まわりや里山で調達されてきた。

材となる樹々などが植えられていた。小さな里山そのものだった。裏のヤマだったのだ。このイグネが除染のために伐採された、という話をくりかえし聞いている。

福島に伝統的な食文化は、原発事故によって痛手を蒙っている。

除染のためにイグネが伐採された。森林の除染は行われない、という。くりかえすが、生活圏とは家屋から二十メートル以内を指すわけではない。人々は山野河海のすべてを生活圏として、この土地に暮らしを営んできたのだ。汚れた里山のかたわらに「帰還」して、

それはみな、福島の豊かな山野や川や海などの自然環境から、山の幸や海の幸としてもたらされる食材をもとに、女性たちがそれぞれの味付けで守ってきた、家の文化であり、地域の文化である。

山菜やキノコばかりではない。切り昆布・麴・コンニャク・笹巻・き・三五八・凍み豆腐・凍み餅。浜通りの、アンコウのとも和え・

ウニの貝焼き・がにまき・お煮がし・金目の煮もの・べんけい・ほつき貝。中通りの、あんぼ柿・さくさく煮・はごめきゅうり・霊山ニンジン・イカニンジン。会津の、えご・こづゆ・ニシンの山椒漬け・みしらず柿。数え上げればきりがない。このなかには、震災後、食材の確保がむずかしいものも含まれているのではないか。

号に掲載された、渡部和さんの「渡部家の歳時記」という長編エッセーを思いだす。奥会津の小さなムラの、小さな家で営まれている食

物館長

どのような生活を再建せよと言うのか。山や川や海を返してほしい、と呟く声が聞こえる。(県立博物館長)